

# 会報

No. 102

令和2(2020)年3月15日

[https://www.library.pref.kyoto.jp/?page\\_id=28](https://www.library.pref.kyoto.jp/?page_id=28)

京都府図書館等連絡協議会

事務局

京都市左京区岡崎成勝寺町

京都府立図書館内

TEL (075) 762-4655

<目次>

1面

- ・令和元年度図書館地区別研修  
(近畿地区)を終えて  
(京都府立図書館)

2面/3面

- ・実務研修会実施報告
- ・北部研修参加報告
- ・中部研修参加報告
- ・南部研修参加報告

4面

- ・探究学習支援と図書館の役割  
(京都府立久美浜高等学校  
(丹後緑風高等学校久美浜学舎) 図書館)

## 令和元年度 図書館地区別研修 (近畿地区)を終えて

京都府立図書館 堀 奈津子

令和元年度図書館地区別研修(近畿地区)を今年一月二十八日から三十一日までの四日間、京都市勤業会館みやこめっせを主会場に実施しました。全体テーマは「これからの図書館サービス」と題し、変化の激しい現代及び将来の図書館像を探るために、ご活躍中の講師を招聘しました。以下、その概要を簡単に紹介します。

文部科学省行政説明では、総合教育政策局地域学習推進課図書館・学校図書館振興室室長補佐の荒木正寛氏から、社会教育と図書館の関係をはじめ、読書バリアフリー法、地方財政措置要望などを詳細に解説いただきました。

基調講演「これからの図書館サービス—二〇三〇年の図書館」では、同志社大学大学院教授原田隆史氏から、従来の成功体験をそのまま継承できない今後の図書館は、何を中心にサービスを展開して魅力を高めるのか各館で意思決定が求められる。その際には分析のために様々なデータを組み合わせること、また図書館の書誌やレファレンス協同データベースなどの情報資産を活かすことなどをパワフルにお話いただきました。

講義一「海外の日本図書館と知のネット

トワーカー—国際日本文化研究センターの資料提供・情報発信とその意義」では、国際日本文化研究センター図書館の資料利用係長江上敏哲氏から、海外のユーザを想定し、日本の地域資料を世界共有資源にするためには、現在日本で遅れているデジタル化の推進が極めて重要であることなど、各種事例をもとにご説明いただきました。

講義二「届けにくい本の届け方二〇二〇」では、ブックディレクター幅允孝氏から、本と人の出会いのために、まずは目の前の人のための選書から汎用性を高めていき、本の差し出し方については、例えば企画棚で意外な本を組み合わせて納得感を持ってもらうなど、日々を少しでも良くするための思いを語られました。またワークショップでは各班ごとテーマ展示を行い、幅氏から助言や講評をいただきました。

講義三「子どもと本をつなぐ人々の流れの中で」は、天理市立図書館館長補佐高橋樹一郎氏から、イギリスやアメリカに比べ公立図書館児童サービスの発展が遅れた二十世紀初めの日本で、子ども文庫という小さな図書館が残した日々の活動の意義を年代順に紹介され、今を再考する機会としていただきました。

講義四「図書館サービスと著作権」では、国立国会図書館関西館アジア情報課長南亮一氏から、図書館と著作権の基本的な関係や具体的な事例の対応について、多くのスライドをもとに解説をしていただきました。個別の質疑応答では多

くの挙手があり、いずれにも丁寧な回答をいただきました。

講義五「こんなことで困っていませんか?—図書館の自由」を学び直す」は、沖縄国際大学教授山口真也氏から、日常の図書館業務でよくある疑問や誤解について、図書館の自由、及び基本的人権と関連付けて考える機会にさせていただきました。

講義六「コミュニケーションの基本とあり方」は、京都ブライトンホテル宿泊部ハウスキーピング課長浪花ゆき子氏から、ホテルでの接客の基本を提示していただき、ワークショップも交えながら接遇のホスピタリティ、同僚のチームワークの大切さをソフトな語り口でお話いただきました。

以上のいずれの講義からも、参加者は新たな気づきや多くの刺激を受けられたのではないのでしょうか。ぜひ職場でその思いを共有し、今後の図書館活動に活かしていただければと切に願います。



研修と併せて開催した「京都府立図書館岡崎開館110周年記念事業・特別展示」の様子

# 実務研修会実施報告

## ◎北部会場

「公共図書館と少子高齢化

—高齢者・障害者を深く理解する—

日程 令和元年十一月十五日(金)

場所 宮津市福祉・教育総合プラザ

講師 小川 敬之氏(京都橘大学教授)

## ◎中部会場

「ワコールスタディホール京都

く企業が提供する学びのサービス」

日程 令和元年九月十九日(木)

場所 ワコールスタディホール京都

講師 徳持 隆二郎氏(㈱ワコール)

## ◎南部会場

「児童虐待の現状」

日程 令和元年十二月十日(火)

場所 向日市立図書館

講師 兒玉 周司氏

(京都府家庭支援総合センター)

## 北部研修参加報告

伊根町コミュニティセンター

ほっと館図書情報室 富倉 雅也

今年度の北部研修は、作業療法士としても活躍されている京都橘大学教授の小川敬之氏を講師にお招きし、公共図書館と少子高齢化をテーマに講演いただきました。

はじめに「地方公共図書館を取り巻く環境」

「図書館は、子ども向けのサービスは

得意だが、高齢者向けサービスは苦手」講師の言葉にハッとさせられました。

誰もが子ども時代を経験しています。そのため、子どもに必要なことは自身の経験から考えられます。しかし、高齢者の経験はまだありません。核家族が進み、祖父母と暮らす時間が少ないとなおさら高齢者が必要としていることを自分の経験に照らして考えるのは難しいと言わざるを得ません。

他方で府内でも少子高齢化が進んでおり、特に府北部はその状況が顕著です。

伊根町では、未成年者の人口比率が十%に対して、六十五歳以上が四十七%、後期高齢者(七十五歳以上)に限っても二十七・六%です。ほっと館の登録者も、未成年者が二六・五%、子育て世代の三十〜四十代が二九・五%と比べて、六十五歳以上が二十%と決して少なくありません。

内閣府の調査では二〇二五年に五人に一人が何らかの認知症を発症していると推計しており(※)、認知症への対応は急務です。※内閣府 『平成二十八年版高齢社会白書』(P.二十一) 認知症との向き合い方

認知症について図書館職員の多くが一般と同じレベル——「なにもわからなくなっている状態」との理解に止まっているのではないのでしょうか。

しかし、現代の医療では、認知症とは記憶や言語、知覚に関する障害よりも、むしろ社会的認知(関係性)の障害と捉えています。

図書館職員は、感情も個性もある一人の人間として認知症患者と接しなければ

いけません。その上で重要なことは、認知症患者は、自分の認知障害を自覚し、その不安からくる強いストレス下にあることです。このような相手の状況を理解し、認知症と向かい合う必要があります。

図書館からのアプローチ

認知症について図書館ができることは、大きく次の三点です。

(一) 認知症を正しく理解するための情報提供

「地域社会に向けて」

認知症への誤解と偏見は根強くあります。

図書館の役割は、地域社会が認知症の人を受け入れられるよう、正しい情報を伝えることです。特に子どもへの情報提供は重要です。展示や読書会、読み聞かせ等を通じて、積極的に情報を提供していくことが求められています。

(二) 孤立させない環境の提供

「家族に向けて」

認知症介護で最も大きな課題は、家族の孤立を防ぐことです。

同じ悩みを抱えた人々が図書館で交流を持つことは非常に効果的です。

また、当館が行った介護担当者へのヒアリングでは、図書館に具体的な介護技術以上に体験記等を通して、同じ悩みを抱えている人がいることに気付く機会を提供することも求められています。

(三) 穏やかな日常としての読書機会の提供

「本人に向けて」

認知症患者も感情を持つ一人の人間です。そのため、他の利用者と同様に読書機会を提供することが図書館に求められます。

ただし、不安によって、性格の中の攻撃的な面や悲観的な面が増幅されがちです。対応する上で大切なことは、こちらの不安が相手にも伝わり、より不安な状態にさせないことです。

また、地方の図書館は立地的に車を使わずに来館するのが難しく、認知症の人が一人で来館するのは困難なのが実情です。そのため、移動図書館をはじめ、高齢者施設や自宅への配送等、どのようにアウトリーチ(現場出張)を図っていくかが図書館に求められている課題です。

まとめ

今回の研修は、作業療法士の立場から図書館に求める役割がテーマでした。今回の研修を踏まえて、図書館としてどのように応えたか、図書館職員自身が講師となった研修が近い将来開催されることを期待します。

ほっと館では、最初の第一歩として関係機関との連携を図るところから始めています。

## 中部研修参加報告

京都府立京都学・歴史館 大瀧 徹也

今年度の中部研修は、ワコールスタディホール京都で運営に関わる徳持隆二郎氏を講師にお招きし、企業が提供する学びのサービスをテーマに講演いただきました。

ワコールスタディホール京都は、スクール、ライブラリー、コワーキングス

ペース、ギャラリーを併設した学びの空間です。「美的好奇心をあそぶ、みらいの学び場」をテーマに、「身体」「感性」「社会」の三つの美についてアプローチできるような空間づくりがされています。

ワコールと聞くと、男性には近寄りたくない感じがしますが、京都駅前という立地もあり、コワーキングスペースを利用される男性の姿を見かけました。有料会員制ですが、落ち着いた空間でゆっくり過ごせるよう設計されています。

ワコールスタディホール京都の運営には、司書も芸員もいません。講師の徳持氏は、ワコールで広報宣伝を担当されており、講演では、企業の広報宣伝部ならではの話を聞くことができました。

その中でも特に印象的だったのが、SNSでの発信についてです。広報媒体が多様化する中、SNSを使った広報戦略は今や必須のことです。メール会員への情報発信、イベントの誘致など、ワコールの本業から得られるネットワークを活用し、ブランドインパクトの向上、ワコールファンの拡大を目指し、集客に結びつけているようです。

もちろん、ライブラリーの果たす役割もとても重要です。

ライブラリーに並べる本の選書は、ブックディレクターの幅允孝氏(有限会社BACH代表)に一任しています。「美」をテーマにしたライブラリーとして、ファッションだけでなく、食や暮らし、アート、自然との触れ合い方など、

十一のテーマに分けて本が並べられています。

印象的だったのは、本棚の中に「箱庭」と呼ばれるフレームがあり、小さな展示スペースになっていました。ライブラリーにはNDC分類という概念は存在しないので、幅氏は、装丁や全体のバランスを見ながら最終的な配置を決めていくそうです。現場に来て本を見て、アドリブで並べ方を決めていくという点に驚きました。



ライブラリー見学の様子

見学の後は、グループに分かれて「すぐに実践できそうなこと」「今後やってみたいこと」について意見を交わしました。企業の図書館という普段とは全く違う環境を目の当たりにして、各グループとも活発な議論をしていました。

最後に、グループワークで参加者の共通認識となったことを紹介します。  
・ゆとりのある配架と空間づくり  
・くつろげる空間(ソファとか!)  
・本を手にとってみたくなる工夫  
・利用者同志の交流スペース

・イベントPRは発想の転換をみなさんが、今日の経験をそれぞれの館に持ち帰り、どのように実践されるのか、今後の期待が高まります。



グループワークで熱心に話し合う参加者

### 南部研修参加報告

井手町図書館 鈴木 浩史

今年度の南部研修では「児童虐待」をテーマに、京都府家庭支援総合センターの児玉参事をお迎えして、同センターでの取組をご紹介いただきました。

「京都府家庭支援総合センター」は様々な家庭問題に対し、総合的な支援を提供するために、京都児童相談所・婦人相談所・身体障害者更生相談所・知的障害者更生相談所を統合してできた施設です。従来であればそれぞれの機関で別々に対応されていた問題が、ワンストップで対応できるようになっています。

京都府内で児童虐待の相談にあたる機関は全部で六つ、家庭総合支援センターのほか、宇治児童相談所および京田辺支

所、福知山児童相談所、京都市の二つの児童相談所です。京都市を除く四つの児童相談所はそれぞれ管轄区域の人口が二十八万人前後になるように設定されており、児童数も各四〜五万人です。また、児童虐待は他の家庭問題とも密接に関係しているため、宇治・福知山の児童相談所も「家庭支援センター」として、子どもの問題だけでなく幅広い家庭の問題に対応しています。

児童虐待は①身体的虐待 ②心理的虐待 ③性的虐待 ④ネグレクト(放置)の四つに分類されます。いずれも子どもに対する重大な権利侵害であり、成長や発達に著しい影響を及ぼします。自己肯定感を育み、手本を見せながら導く「しつけ」とは明確に異なるものであつて、保護者の意図や親権では正当化されるものではありません。近年はDVや兄弟への虐待を見せることも虐待として扱うことにより、「心理的虐待」の相談・通告件数が増加しており、全体の半数以上を占めるそうです。

虐待者は実父・実母が多く、年齢や学歴、年収とは関係がないと云われています。むしろその背景には「保護者の要因」「子どもの要因」「養育環境の要因」が複雑に絡みあっていることから、子どもだけでなく家庭の構造的な問題として捉え、総合的な支援が求められます。

こうした虐待の早期発見のため、図書館を含む児童福祉に関わりのある関係機関・団体や職務上関係のある個人には、早期発見の努力義務が法律で定められて

います。また、虐待を発見した場合には速やかに市町村・児童相談所・地域の児童委員へ通告しなければなりません。その際、通告者は守秘義務違反などの刑事罰に問われることはなく、個人が特定されるような情報は固く守られます。

とはいえ、実際に私たち図書館員が児童虐待の疑いのある子どもに出会ったとき、具体的にどういったアクションを起こせばよいのでしょうか。それについて児玉氏は、声掛けなどを通じて「気にかけている」ということを子どもに伝えること、「この大人とは安心して話せるんだ」という関係性を築くことが大切だと云います。また、些細な情報でも後々きいてくることもあり、少しでも疑わしいことがあれば、児童相談所や市町村の子ども支援担当課と情報を共有することが重要で、その子への対応の仕方や気をつけるべきポイントなど、把握している情報を教えてもらえらることもあろうです。

最後に児玉氏は、家庭や学校に居場所のない子どもが図書館へ逃げ込むことはありうるとした上で「居心地の良い場所として子どもが図書館を選んだ」ということであり、温かく見守り、寄り添ってほしいとおっしゃっていました。

私たち図書館員は「図書館の自由宣言」が云うまでもなく、利用事実を含む個人情報取り扱いには慎重になるべきですが、こと児童虐待に関しては、子どもの命に係わる問題であり、今まで以上に他機関との連携を考えていく必要があると認識を新たにしました。

## 探究学習支援と図書館の役割

京都府立久美浜高等学校

(丹後緑風高等学校久美浜学舎 図書館)

伊達 深雪

昨年ライブラリー・オブ・ザ・イヤール優秀賞を、学校図書館単館では史上初めて受賞しました。受賞理由は「高校生と実社会との繋がりを深める学校図書館改革」、推薦者にとくに評価されたポイントは、地域住民の協力も得ながら開催してきた「ウイキペディアタウン」への生徒の参加と、それを教育活動に繋げてきた「無ければ作ろう、地域資料（京都女子大学・桂まに子氏談）」の取組でした。

久美浜高校図書館は、「図書館の役割は〇〇」として利用者を選別するのではなく、「その社会で必要とされるもので図書館にしかできそうにないこと、図書館が担うのが適していること」のすべてが「図書館の役割」と考え、未知の利用者にも寄り添ってきました。そうした理念から始まったのが、二〇一六年からの学校図書館の一般公開（期間限定）。近代的な文化施設が少ない地方で見える機会のない企画展を誘致し、一般にも公開する取組は、従来の利用者である高校生だけを視野に入れていけば校内企画に留まっていたでしょう。しかし、高校生も地域社会の一員であるからには、地域から受ける影響もあります。地域の文化や教育への意識が高校生の学習に影響する可能性から、地域住民全体の読書や図書館活用

の質を向上させる必要を感じました。地域住民に学校図書館まで足を運ぶ価値がある、と、思わせる企画展を展開するため、様々な企業や団体の御協力を得ていくなかで、結ばれた縁のひとつが、オンライン百科事典 Wikipedia に地域の価値ある記録を発信する活動「ウイキペディアタウン」です。

ウイキペディアタウンもまた、二〇一七年にライブラリー・オブ・ザ・イヤール優秀賞を受賞した取組です。京丹後市では二〇一八年秋に、まちおこし「こまねこまつり」の一企画としてスタートし、二〇二〇年現在、日本屈指の開催エリアとなりました。発端は、久美浜高校での地域探究授業で、ほとんどまったく紙の図書資料が活用されない現状に対する、図書資料が活用されない現状に対する、司書の苦肉の策でした。もともと郷土資料は研究者も少なく、検証に適した資料は市販されていません。郷土料理「ばらずし」の調べ学習で、文献調査に不慣れな高校生でも着実に図書資料を発見・選択できるように、まとまりのない資料群を收拾しておくレファレンス・ツールとして、Wikipedia に出典の書誌情報を記載頁まで明記して「ばらずし（丹後地方）」を書きました。

アメリカやオーストラリアの図書館に限って二〇一六年頃から盛んになってきた活動に、「ライブラリアン・1レファレンス (#1Lib1Ref)」というものがあります。「現代、多くの人が情報収集の手段として Wikipedia を活用している以上、その情報に確かな

出典情報を追加し、信頼できるものとしていくのは図書館員の使命である」という考えに基づき、図書館司書はオンライン百科事典 Wikipedia に、図書資料等の出典情報を追記しようという取組です。

自宅から容易にアクセスでき、物理的な限界のないインターネットの情報の実体は、地方と都市住民の情報格差を着実に縮めます。生活圏のなかで得られる情報の充実、知的生産活動の充実につながり、若年層であれば学力に、社会人であれば経済力に結びつきます。「国民の教育と文化の発展に寄与すること」を目的とする図書館の役割を、従来の紙媒体でのサービス継続や利便性の向上は当然のこととして、プラス、インターネット活用という視点も取り入れていくことは、今日必須といえるでしょう。

インターネットを手掛かりに、図書館に眠る本への導きを。あらゆる利用者に必要とされ、期待される図書館であり続けるよう、努めていきたいと思っております。



図書を手にする生徒たち